

## (案)

「日本海中南部の海域活断層の長期評価（第一版）―近畿地域・北陸地域北方沖―」  
で新たに評価対象となった活断層で発生する地震の予測震度分布（簡便法計算結果）

令和 7 年 6 月

地震調査研究推進本部事務局

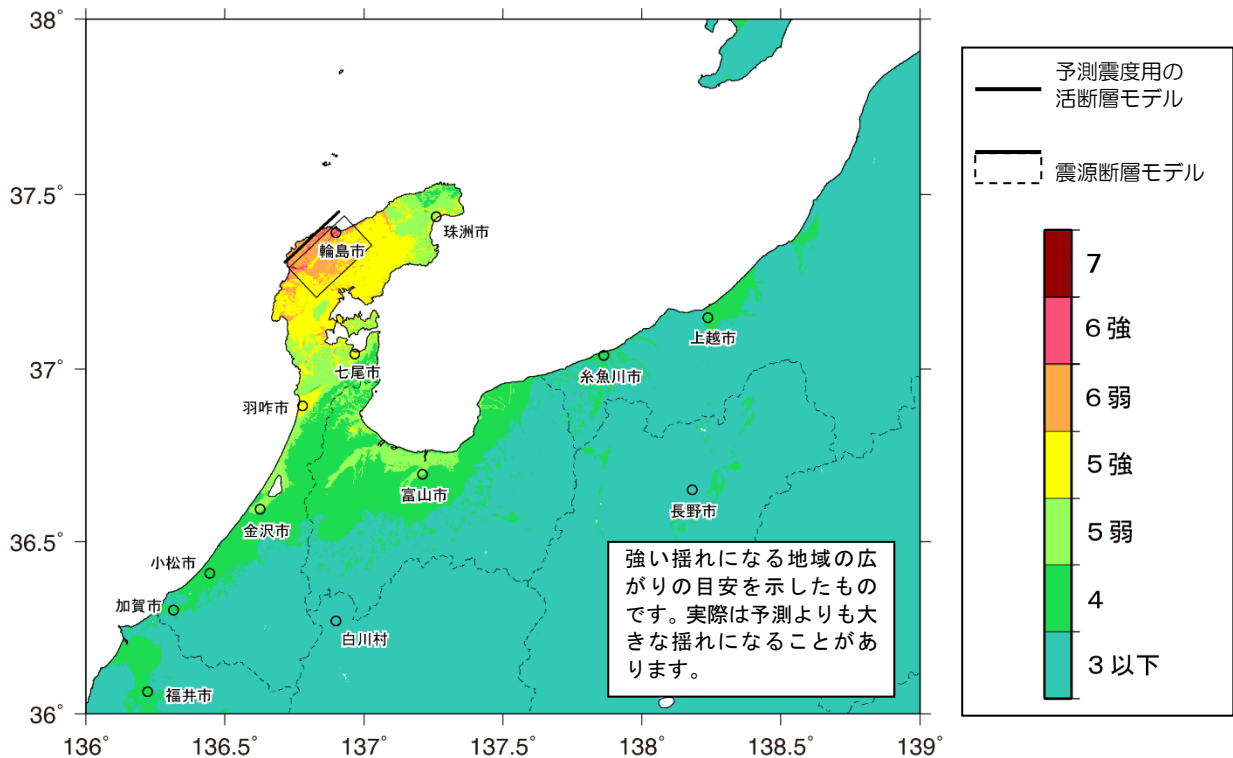
地震調査委員会は、令和 7 年 6 月に「日本海中南部の海域活断層の長期評価（第一版）―近畿地域・北陸地域北方沖―」（以下、日本海中南部の長期評価）を公表しました。日本海中南部の長期評価では、主要活断層帯及び沿岸海域の主要活断層帯の選定基準や陸域への地震・津波被害を踏まえて、断層長さ 20 km 程度以上の海域活断層を主な評価対象とし、海域活断層ごとに位置・長さ・形状・活動度などを評価しました。また、長さ 20 km 程度未満の断層であっても確実に活断層と認定できるものについては、海域の短い活断層として位置と長さを評価しました。今回、評価が行われたそれぞれの活断層で発生する地震に対するイメージを持って頂くことを目的に、想定されている地震が発生した場合にどの程度の揺れに見舞われる可能性があるかについて、計算を行いました。次ページ以降に、日本海中南部の長期評価における評価対象の海域活断層（帯）ならびに海域の短い活断層について、簡便法により予測震度分布を計算した結果を掲載しています。長期評価結果と併せて、防災対策の一助として頂ければ幸いです。

<予測震度分布図を掲載した海域活断層>

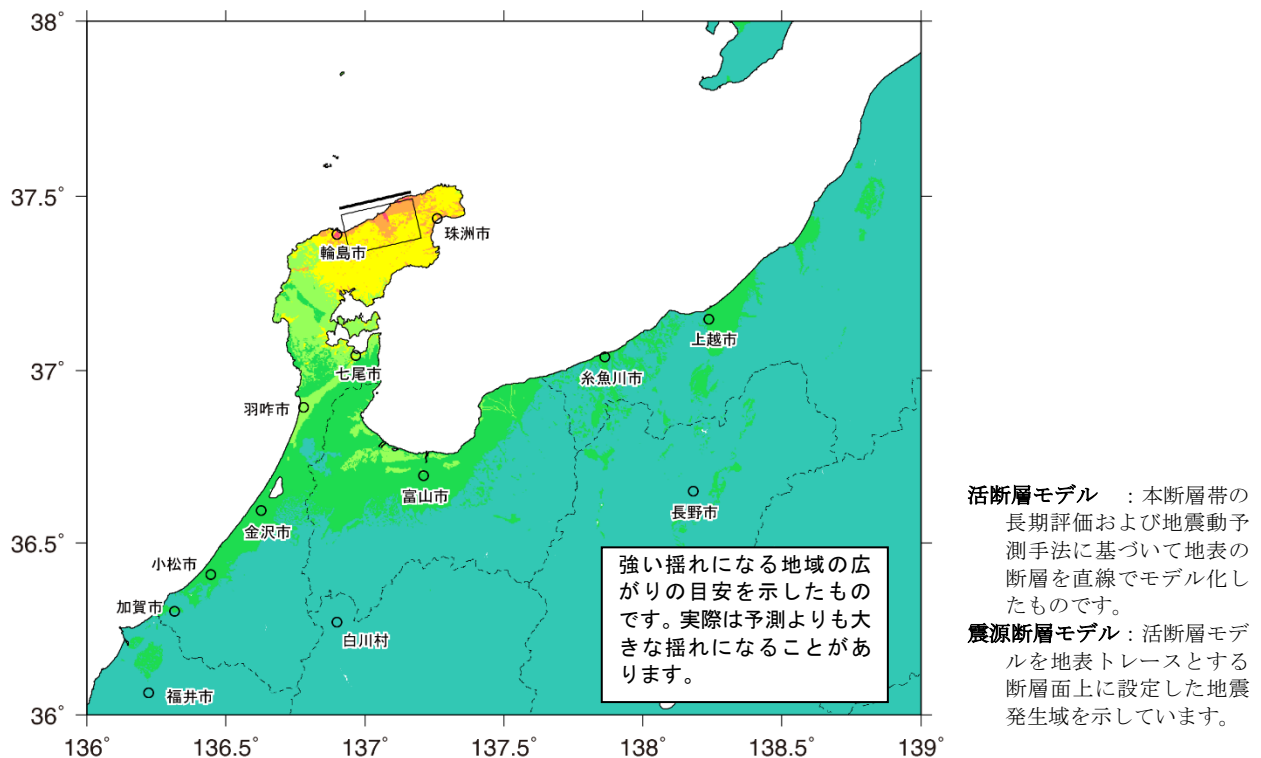
- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| ・ 沖ノ礁北方断層         | ・ 海士岬沖東断層   |
| ・ 経ヶ岬沖断層          | ・ 門前断層帯     |
| ・ 小浜沖断層           | ・ 沖ノ瀬東方断層   |
| ・ 浦島礁北方北断層        | ・ 能登半島北岸断層帯 |
| ・ 若狭海丘列北縁断層       | ・ 輪島はるか沖断層  |
| ・ 越前岬西方沖北断層       | ・ 能登半島北方沖断層 |
| ・ 浦島礁北東断層         | ・ 舢倉島近海断層帯  |
| ・ ゲンタツ瀬・大グリ南東縁断層帯 | ・ 七尾湾東方断層帯  |
| ・ 加佐ノ岬沖断層         | ・ 飯田海脚南縁断層  |
| ・ 羽咋沖東断層          | ・ 富山トラフ西縁断層 |
| ・ 羽咋沖西断層          | ・ 富山トラフ横断断層 |
| ・ 内灘沖断層           |             |

【参考】能登半島北岸断層帯の地震による予測震度分布（簡便法）

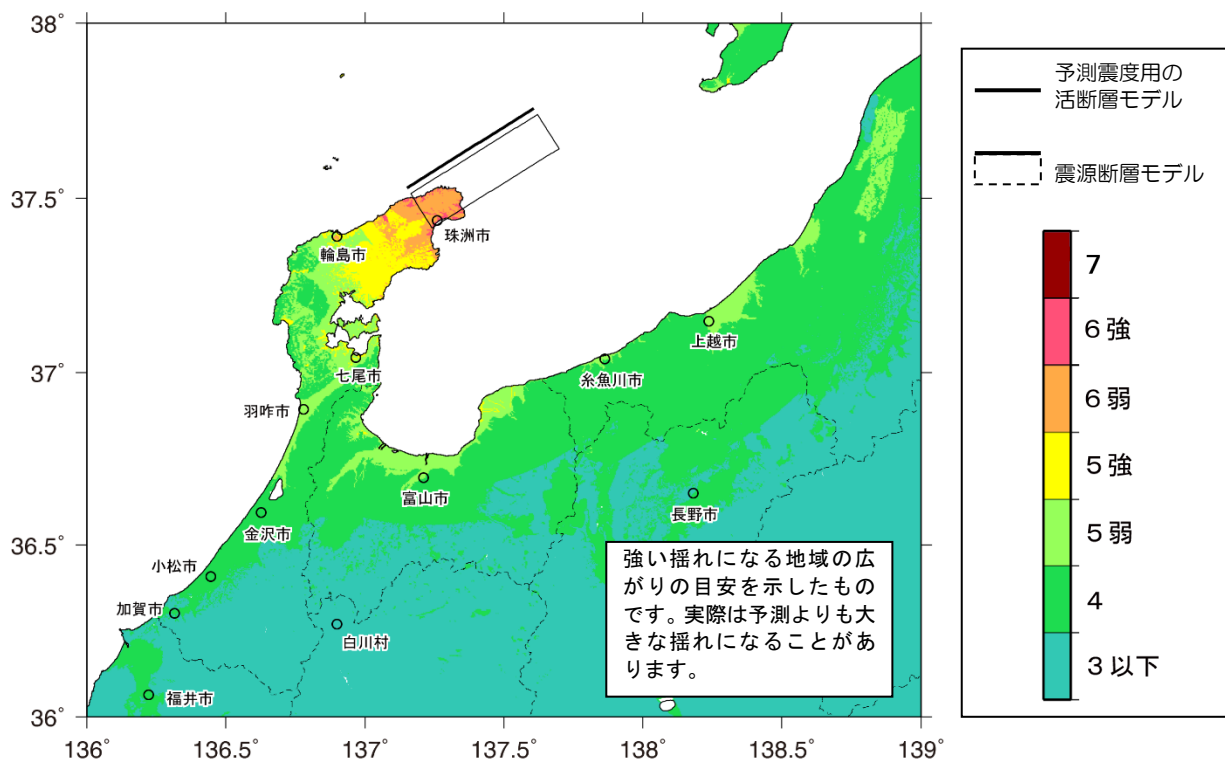
猿山沖区間



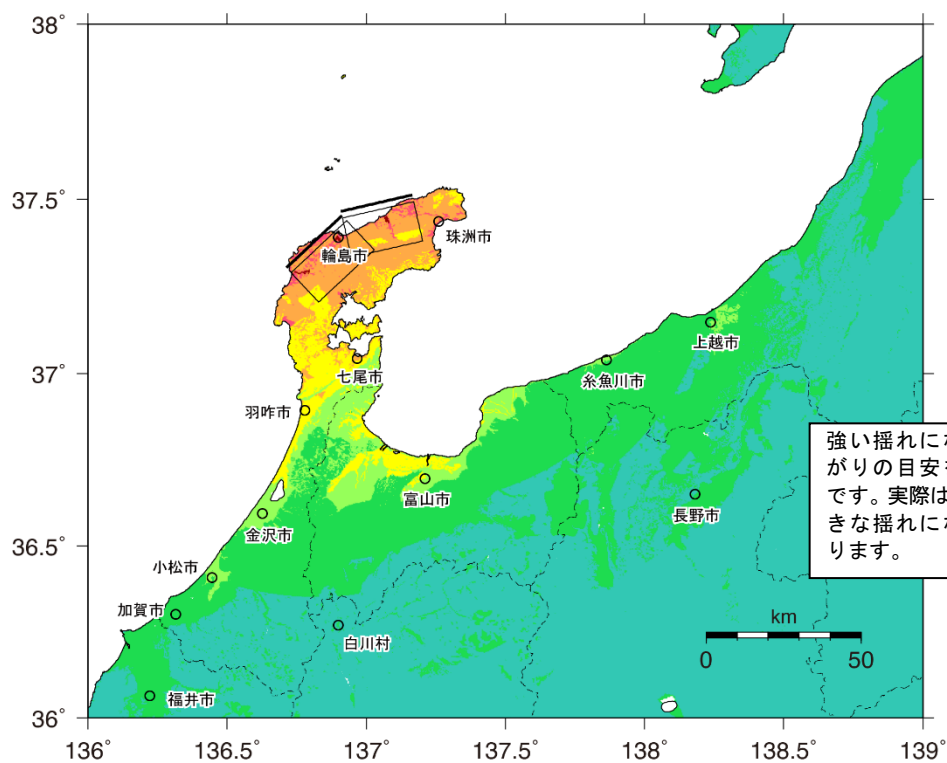
輪島沖区間



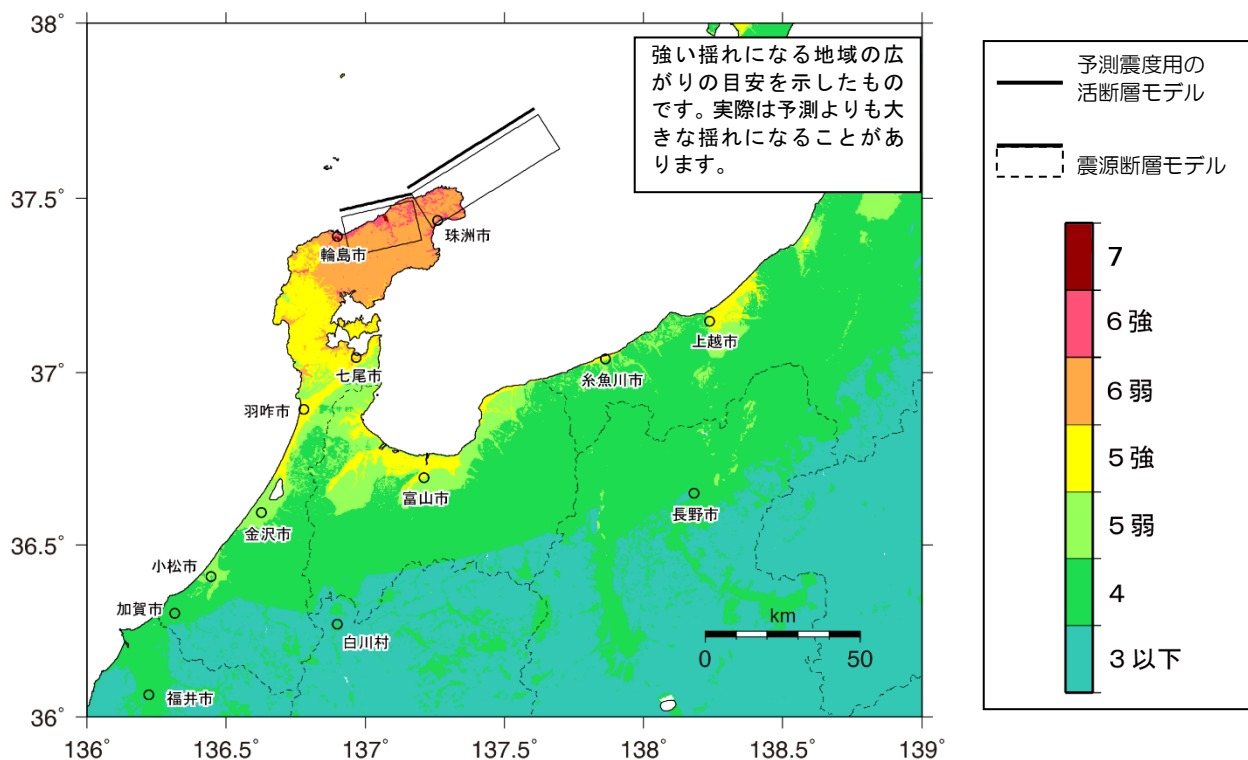
## 珠洲沖区間



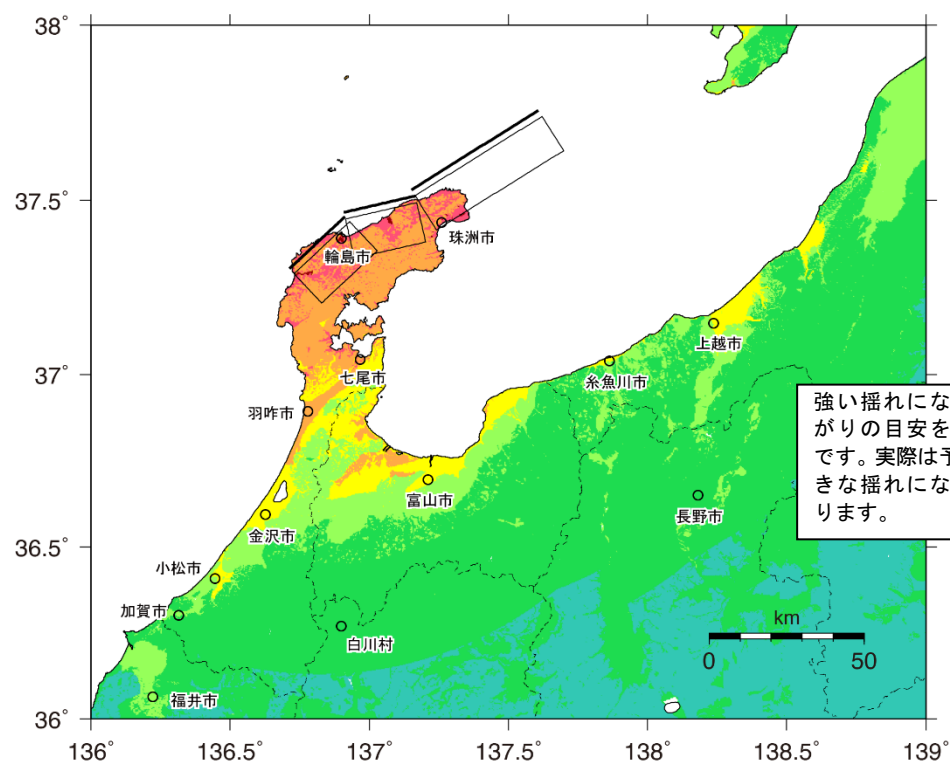
## 同時活動（猿山沖区間・輪島沖区間）



# 同時活動（輪島沖区間・珠洲沖区間）



# 同時活動（猿山沖区間・輪島沖区間・珠洲沖区間）



## 解 説

能登半島北岸断層帯は、能登半島北岸沖からその北東沖に断続的に連続する東北東－西南西走向の長さ約 94 km の南東側隆起の逆断層です。井上・岡村（2010）に従って、西から猿山沖区間、輪島沖区間、珠洲沖区間に区分されます。

猿山沖区間は長さ約 24 km の南東側隆起の逆断層です。猿山沖区間全体が一度に活動した場合、その地震の規模はマグニチュード (M) 7.1 程度になる可能性があります。

輪島沖区間は長さ約 23 km の南東側隆起の逆断層です。輪島沖区間全体が一度に活動した場合、その地震の規模は M7.1 程度になる可能性があります。

珠洲沖区間は長さ約 47 km の南東側隆起の逆断層です。珠洲沖区間全体が一度に活動した場合、その地震の規模は M7.6 程度になる可能性があります。

猿山沖区間と輪島沖区間が一度に活動した場合は M7.6 程度、輪島沖区間と珠洲沖区間が一度に活動した場合は M7.9 程度、猿山沖区間から珠洲沖区間まで全体が一度に活動した場合は、M7.8－8.1 程度の規模の地震になる可能性があります。

前 3 ページの図は、そのような地震が発生した場合に予測される、海域活断層（帯）の周辺地域の震度分布を示しています。

なお、実際の揺れは、予測されたものよりも 1～2 ランク程度大きくなる場合があります。特に活断層の近傍などの震度 6 弱の場所においても、震度 6 強以上の揺れになることがあります。

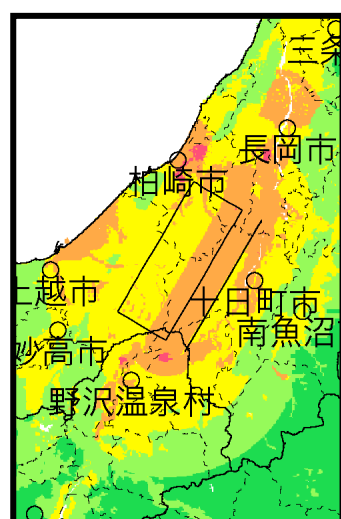
## 簡便法と詳細法による予測震度分布の計算結果の違いについて

## ～ 十日町断層帯西部の地震の例 ～

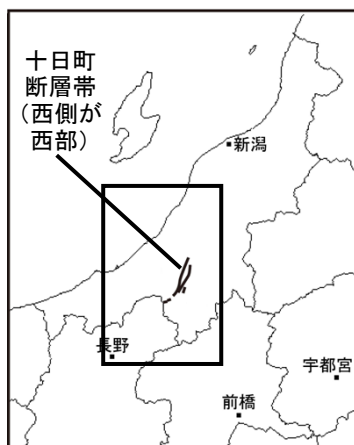
十日町断層帯西部の地震を想定した予測震度分布の例を以下に示します。

簡便法（左図）では、主に地震の規模と断層面からの距離および浅い地盤での揺れの増幅を考慮して計算を行っています。この方法による予測震度は、微細な様子を示すものではなく、震度分布の概要を表したものとと言えます。

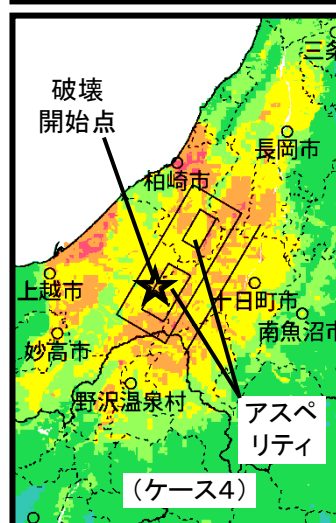
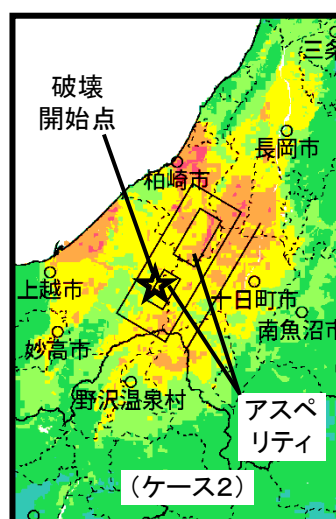
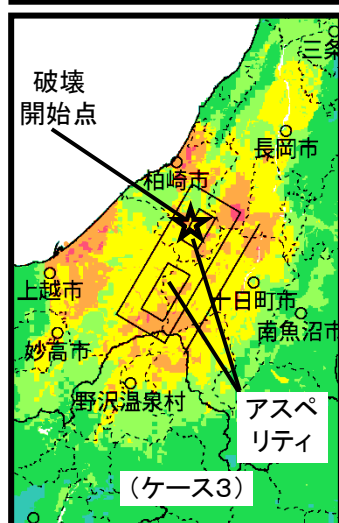
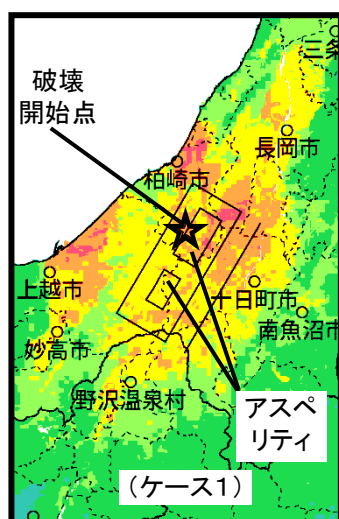
これに対し、詳細法（右4枚の図）では、破壊が始まる場所や、強い地震波を出す領域（アスペリティ）の位置を仮定して、複雑な地盤構造を考慮した計算を行っています。この方法によれば、簡便法に比べて、より詳細に実際の地震の起こり方を想定した震度分布を予測することができます。



簡便法による予測震度分布  
(今回適用した方法)



十日町断層帯西部での計算結果  
の表示範囲（地図の黒枠内）



詳細法による予測震度分布  
(震源の設定が異なる4ケースを計算)

